

二〇一二年四月三〇日

せせらぎの綺羅に紛れて糸蜻蛉  
研ぎ師いま軽き音立て青葉影  
奏である園の一水蝌蚪の池  
画材屋のテント庇に燕来る  
懸り藤仰ぐ大樹の名を知らず  
小手毬の垣根を揺らしすれ違ふ  
病窓に街動き出す音おぼろ  
庭石に触れなんとする藤の房  
蒲公英のグランド蹴つてキックオフ  
針刺されゐること忘れ春眠し  
春憂しやナースをオイと呼ぶ輩  
男どち野球論戦躊躇燃ゆ  
理髪師の剃刀頬に目借り時

嶋れるクレッシェンドを繰り返へし  
繫ぎし手ほどきて蝶に駆け出す子  
臍なる世界へ深く麻醉吸ふ  
藤の香に酔ひたるごとく虻群るる  
五彩なし里の山々笑ひけり  
リハビリの歩数を延ばす若葉風  
志賀直哉旧居の庭に春惜しむ  
神名備を統ぶる大樹や懸り藤  
古民家に語り部を聞く春の宵

毎週句会秀句・みのる選・一〇二三年五月一日